

後藤靜香選集

第六卷

善本社

刊行のことは

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には購読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤勞教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスペラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。

後藤静香選集 第六卷

父に抱かれて・聖境に楽しむ・聖書のこころ

一九七八年六月十日 初版

著者 後藤 静香
発行者 山本三四男

企画編集

後藤静香選集刊行会

代表 中山 隆 祐

〒160

東京都新宿区高田馬場一―二三―二
振替 〇―一二二九〇

発行所 株式会社 善本社

東京都千代田区神田神保町一―六〇

電話 東京 二九四―五三一七

〒101 振替 東京 九―一二九五五七

印刷 花山印刷

落丁、乱丁はおとりかえます

目 次

父に抱かれて

いずこに逃れんや	三
慈父の抱擁	一五
人間を呪う男	三
光明喜悅の人格	四
艱難を優遇せよ	五
何を祈るべきか	六
釘を打つもの	六
隣人とは誰ぞ	七
盲人をめぐる事件	一〇
祈りは応えられる	二五

聖境に樂しむ

静寂の揺籃……………	二七
静かなる夕べ……………	二五
荒野の試練……………	二四
微弱を誇らん……………	二三
神はいずこにある……………	二二
枕するところなし……………	二一
孝道の殻を破る……………	二〇
葡萄の園……………	一九
善かつ忠なるしもべ……………	一八
来りて見よ……………	一七
別離の饗宴……………	一六
聖者の憂鬱……………	一五
安らかに向け……………	一四

聖書のところ

イエスの誕生	三〇〇
まず羊飼	三〇三
神の恵み	三〇四
見つけた迷い子	三〇七
その師とその職業	三〇九
神は万人の父なり	三一一
聖なる田舎	三二四
洗礼者ヨハネ	三二六
三つの誘惑	三二八
さすらいの旅	三三三
四人の漁師	三三四
九つのしあわせ	三三七
無抵抗	三三九
自然の子	三三一

集まる人びと	三三三
マルタの不平	三三五
幼な子	三三八
砂上の文字	三四〇
涙の洗礼	三四二
父の愛	三四五
われは誰なるか	三四九
貧者と富者	三五三
最後の晩餐	三五四
イエスの敵たち	三五七
剣をとる者	三六九
十字架	三六一
祈りの革命	三六四
刑場・復活	三六六
「後藤静香選集」第六巻の解説（加藤善徳）	三六九

父に抱かれて

序

単なる修養書ではない、また、いわゆるキリスト教の救いをのべたものでもない。毎月の『法悦』に発表したものの中から十編をえらび、それに小見出しをつけて、多少の取捨を行ったものである。

本書が宗派としてのキリストの教えを伝道するには物足りないであろうが、聖書を研究したことのない人々に、毛嫌いを除くだけの効果はあろう。また教会では何となくびつたりしなかったことを、心からなっとくする点もあるであろう。人生のなやみの中を、今もあえいでいる人たちは、普通の修養書ではいやされないものをいやし、新しい生涯にみちびく手引となるかも知れない。全体を通じて、文芸としての香りをもちたいと思ったが、とくに芸術とか思想とかをふりかざすほどのものでもない。

宗教の畑にも、文芸の畑にも、読みものはたくさんあり、ことに修養書と銘うったものは、いやというほど多い世の中であるが、この書物には、この書物のみがもつ使命がありそうに思われ、ここに識者の叱正を乞うゆえんである。

昭和十一年七月

後 藤 静 香

いずこに逃^{のが}れんや

火焰の旋風の中に

関東大震災火災の直後、被服廠あとの生存者から、夜通し火焰の旋風のなかを方角も分からず、泣きわめき、さけび狂いつつかけまわったという恐ろしい話をきいた。私は、どうかするとこの話が、いまの世の眼前の事実のように見えてしかたがない。どこに逃げられず、どうして助かるかの見こみもたえず泣きたい、さけびたい、狂いたいほどのなやみの中を、目あてもなくかけずりまわってるような人の子がそこにもここにも見える。



相愛してこそ夫婦ではないか。それなのに、ただ契約をよぎなく履行しているような品行方正な夫がある。これにしたごうを義務と心得、貞節と信じ、興味もなく愛もなく、敬もなく、信さえもなく、さびしい顔をいつわって調子をあわせている世間的良妻がある。親と子と、姑と嫁と、大きいみぞをへだてて暮らしている暗い家庭がある。複雑な事情を、義理と習慣でぼかして、虚偽と虚偽とで、毎日のほつれをつくらっている家庭がある。夫もなやむ、妻もなやむ、親も子もなやみになやみながら、しかもみんながその火焰のうずまきの中で、黒い煙に息をつまらせながら、あえぎ苦しんでいる。逃げたい、

逃げ出したいが、どこに逃げ、どうしたらいいかがわからない。



生活のなやみは、日本人の九割九分九厘までを支配している。借金を返そうにも利息にあたる残金さえなく、病人はできる、治療の道はなし、病は重る一方で、看護のため家族はつかれる。また病人ができる。ついに倒れて逝く、負債はかさむ、働こうにも、働く人間がない。また働く人間があっても金になりそうな仕事がない。「生活改善」も、お説だけは拝聴するが、およそ耳遠い話である。行われそうもない空論である。改善しようにも、生活それ自身が否定されてゆく現状ではないか。

家庭の圧迫、生活の圧迫、これだけでも、負いきれぬ重荷であるところへ、社会の圧迫が加わってくる。冷たい世間は、弱いもののために、たすけの手は与えず、かえって法を悪用し、血も涙もなくかすめてゆく。無からさえなお奪い去ろうとする。反抗しえないと見くびって、ふむ、ける、むちうつ。弱者のために、地上は地獄である、社会はのろいの対象である。

「われらいずこに逃れんや」——この声は、山里の伏屋から聞える、海べの漁夫の小舎から聞える、大厦高樓の閨房から聞える、大会社の重役室から、高位高官の事務室から、炭坑から、工場から、店頭から……聞えてくる。

現代の三つの特徴

現代の特徴をあげれば三つある。第一は「複雑」である。古代のような物々交換の時代は望まれない

としても、いまの世は、頭の悪い人間が、世の下積みになるよりほかに仕方がないようにできている。アメリカの大統領が、十分間演説すれば、その反響が、日本の山村の、うす暗い部屋でかっている養蚕におよぶ、生糸の相場がかわり、マユの値段にひびき、やがて「このマユを売って」と待ついなか娘の嫁入り仕度に関係する。ムツソリーニがローマで、新聞記者を相手に大見えをきると、日本の鉄の相場がかわる。そうしてくず屋がどぶをあさって、ブリキのあき缶をさがしかける。ローマの大殿堂と日本のうら長屋がかくも密接に結びつけられている。昔は、勤儉貯蓄万能であつた、今日においても勤儉まことに結構、貯蓄まことに結構であるが、そのみで生活問題は解決しない。働いても働いてもますますのは借金、うるものは病氣、そうして失望、自暴自棄、反抗、破壊、淫蕩、殺人、自殺などなど、複雑なる現代組織をかんだんなる金言一つで解決することはできなくなった。



現代の第二の特徴は速さである、テンポである、スピードである。いまは何もかもテンポではかられる時代である。飛脚^{かき}をはやいものと思つていたわれらの父祖は、自転車におどろき、汽車、電車におどろき、自動車におどろき、飛行機におどろいた。現代人は、今朝世界のはてに起つた事件を、今夜のラジオで聞きうるにいたつた。スピード万能、それが人間の心をいらだたせた。眼をひらけば、何もかも走っている。

現代に処するためには、電車、汽車、自動車、飛行機を御し、悍馬にまたがったつもりで、これをわが用に供しえねばならぬ、これらのものに対し、臆病なるものはふり落とされ、大地にたたきつけられ

る。

乗物がきらいなどというのは、スピード時代の落伍者である。乗り物を自由に利用しえない人間、汽車賃や自動車賃にこまる人間、これまた悍馬の走るを指をくわえてながめるこしぬけ武士の類である。宇治川の先陣など思いもよらぬ。



現代の第三の特徴を騒音と言う。汽車、電車、自動車の音は言わずもがな、古いにしよの奈良の都の天空を飛行機がとび、爆音が春日野の鹿の眠りをさます時節である。チンドン屋がまわる、楽隊が練る、ラジオが軒なみに黄色い声、しぶい声、青白い声、真赤な声をうならせ、葦酒山門くんしやに入るを許さざる山寺の付近から、木魚の音ならばまだしも、勝太郎の小唄がひびいてくる。新聞は、大活字をならべて、声なき声をあびせ、さらに幾十種の雑誌が、耳をおさえても、手をおしのけて、社会主義を聞けという、日本精神を拝聴せよという、さらに、トルストイにきけ、ゲーテにきけ、孔子にきけ、釈迦にきけという。それどころか近ごろは各種のご利益を書きたて、何でもかでも読めという。その間に分け入って、何々教がおたすけにくる、さてさて昼寝も朝寝もできぬ世の中である。「騒音の時代」とは、まさに現代を象徴する名句である。耳あるものは、聞かざらんとしても聞かざるをえず。神経のいらいらすること、またやむをえざるものがある。

人生一切を逃避する

「われらいずこに逃れんや」人の子は悲鳴をあげてかくいう。逃れんとして逃るるの道なく、逃るるの力さえなきものは、ついに人生逃避の悲劇を演ずる。彼らは猫いらずに逃れ、青酸に逃れ、華嚴に逃れ三原山に逃れ、時には一条の紐に逃れ、嘔き出すガスにさえ逃れようとする。逃るるや、われ一人行くを好まず、時に愛人をともない、時に可憐の愛児をさえともなう。家庭と生活と社会との重開は、複雑なる現世、スピードの現世、騒音の現世と相まって、葦の如く弱き人の子を、無残にも死なれぬ死の深淵に投げ入れる。

理性を逃げて肉林へ

インドに派遣されていた英国の一士官が、非常に酒を飲むので、友人がその理由をたずねると、彼は平然として答えた。「これがインドから逃げ出す最上の策である」と。待合に、カフェーに、深更まで妖艶の魔性とチヨウチヨウ、ナンナンする初老、中老、そして若人のすべてに聞け、彼らは口をそろて言うであらう。「これ実に、悩ましき家庭から、わずらわしき社会から、不愉快にして不可解なる教室から逃げ出す最上最善の方法なり」と。「われらいずこに逃れんや」かく言いつつ悶えつつ、もつとも手近なるところに酒池あり肉林あり、麻酔のウテナあり、忘却の園あるを発見した。

かくして、人生一切を逃避するほど弱くもなく正直でもなく、しかも進んで戦うの勇なく、静かにた

ゆるの力なきものは、理性逃避の肉欲三昧にしばしの憩い場を求めた。この憩いがさらに深いつかれにおとし入れ、再び起つの勇を奪うものとは気づかない。まれに気づいても、そうするよりほかに自己の憩い場を知らないのである。

芸術の密林へも逃げる

「われらいずこに逃れんや」かくさげびたる第三の群は、幸いにも芸術の密林を見出した。彼らは音楽に遊んだ、文学に遊んだ、みずから演じみずから創作するの力なきものは映画に、舞踊に、劇に常連となりファンとなり、流行スターの後援会員にさえなつた。茶の湯に逃げた娘がある、生け花に逃げた婦人がある。彼らは、それぞれの重荷を一時でも軽くしたために、憩いの場所を見出した。見よ、大都会小都会の別なく、映画館は昼夜の別なく満員となり、レビュー館も劇場も、三円、五円、七円、九円惜しみなく献納せられて、前売り切符数日前すでに売切れの盛況をきたす。この現象を見て、非常時にあるまじき行為と怒り、不景気にも似合わぬと憤慨するをやめよ。もちろん、その中には、単なる遊興の客もあろう、きわめて高級なる芸術鑑賞の篤志家もあろうが、彼らとはかなりの距離をもつ人びとが借金を質に入れ、泣く代りに笑い、待合の代りに、遊廓の代りに、一時の清い憩い場を求め、まれには三原山に急ぐ道中で、一足とまって考えるためにきているものがないとは言えまい。彼らをことごとく遊興の客と思ひ、ことごとく芸術愛好の士とみるは、人間を知らず、人生の底を流れる涙の川の深さを知らざるものの謬見である。

大自然の中に安住の地を

「われらいずこに逃れんや」かくいつて第四の群は蒼空を仰ぎ大地を見つめた。頭こうべをあぐれば空には深い海がすみ、雲の船が浮んでいた。俯して波もなき大洋の底を見れば、高い円天井がうつり、星の花がまたたいていた。耳をかたむけると小鳥が歌い、数歩を郊外にうつせば、かおり高い花が、黄に紫にほほえんでいた。まくことをせず、刈ることをしない小鳥たちも食に窮せず、一羽一銭で売られる雀さえもおどっていた。ソロモンの榮華の衣にまさるものは、野の百合だけでなかった。春のタンポポが、夏の矢車草が、秋の野菊が、冬の水仙が、みんな同じように美しかった。

彼は、すみれをつんだ、虞美人草をつんだ、行きくれて木の下かげを宿として、花を今宵のあるじとたのしんだ。とうとうとうねる大河、さらさらとおどる溪流、天をつく古杉、地をはうしやくなげ、巨木に集くう荒鷺、五葉の松の葉かげにねむる雷鳥、岡に、峰に、谷に、林に、彼の行くところ、掬するに水あり、いこうに蔭あり、飢えをいやすに木の実があった。

げにや、大自然こそは、こころ清き幾多人の子の安住の地であった。これを目あてに兼行も逃れた、一茶も逃れた、芭蕉も逃れた、釈迦も逃れた、キリストも逃れて四十日四十夜の断食さえした。孔子は天下に道行われざるとき「イカダに乗って海に遊ばん」と、ひそかに仙境を夢みた。キリストは幾度か群集をのこし、弟子をさえはなれ、ただ一人山深くわけ入った。

神のふところにとび込む

「われらいずこに逃れんや」かくいいて第五の群は神のふところにとび込んだ。名を仏とかえて呼ぶとき、釈迦がそれであった。幾多の名僧知識はいうもさらなり、佐々木四郎高綱も入山した、熊谷次郎直実も、青春敦盛が吹きならす青葉の笛を聞きおさめとして、みほとけの大きいふところにとび込んだ。

必ずしも頭をまるくするにおよばない、必ずしも墨染の衣をまとうに及ばない、必ずしも聖書をかかえ高壇から手をさしのべて、主よ主よと叫ぶには及ばない。神は、われらが心を清くするとき、父よと慕い求むるとき、そこに居給うのである。われらのうちに、父よとよばないではおられぬたましい——が天父のまことの子なる姿が宿っている。このたましいが目ざめるとき、地上という束縛の世界に、天上に通う無形の白道びやくどうが開け「父よ、子よ」と呼びかわす別個の世界が展開される。そこに活きた宗教がある。宗派、民族、伝統に無関係に宗教がある。そこに絶対の平安がある。世の波は荒れ狂うとも、何物にも乱されぬ平和の憩い場がある。キリストは、山に逃れた、さびしきところに逃れたが、地上の名は山でも、そこは父の家であった。人間の眼には孤独と見えても、父とともに語る至幸至福の境地であった。

逃避はついに不可能である

三原に逃れ、華嚴に逃れるものは、幾万分の一の例外をのぞき、再びこの世に帰ってこない。酒池肉林に入るものの多くは、一時の憩いと思いのほか、ついに永遠の死にいたる。芸術に逃れるもの、ミイ